教育フィールド研究Ⅶ シラバス

【授業内容】

人間が生きていくために欠かせないのが「食」であり、いのちの糧「食」の大切さを子どもたちに伝えていくことは、教員の大きな役割である。また、生産現場では、どんな人たちがどんな思いを持ち、どんな風に生きているのか？　そのことを知っておくことは、将来教員になる者にとっては大変大事であり、必要なことである。

しかしこれまで大自然と対峙した食を生み出す現場での実習はなかなか実現できなかった。本講義は、酪農生活体験を軸とした２泊３日の生産現場での「酪農家民泊体験実習」を行い、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに「食」や「命」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有していく。

【授業の目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」を通じて、実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、「食」や「命」等に関する意識や考えを深め、教員として子どもたちに伝えるための手法を検討し、議論、共有する。また、抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ、「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育について検討する。

【到達目標】

酪農生活体験を軸とする「酪農家民泊体験実習」に参加することで、「食」や「命」等に関する意識や考えを深めることができる。

実体験でのみ学べる現場での生の知識や気づきをもとに、他者とも議論、意見を共有しながら教員として子どもたちに伝えるための手法を検討することができる。

抽出された課題をもとに「食」から「生きること」へと議論を発展させ「社会の中で生き抜くチカラ」を育む教育のあり方を検討していくための基礎的視野を養うことができる。

お問い合わせ先

〒085-8580 北海道釧路市城山１丁目15 番 55 号　北海道教育大学釧路校 (担当：准教授 宮前 耕史)

TEL：0154-44-3238　FAX：0154-44-3218

平成 30 年 3 月発行

いのち・食・生きるに触れる

酪農家民泊体験実習 2017

〈教育フィールド研究Ⅶ〉
実施報告

北海道教育大学釧路校

食の話題にあふれる現代社会。教師が子どもたちに伝えられるコト。

いのちの糧「食」の価値を感じ・考え・伝えるために

～教師を目指す学生のための酪農家民泊体験実習～

現在、学校においても様々な食育の取り組みが行われている。

これをさらに充実発展させるためには日々子どもと向き合う教師自身こそが「食」とこれを生み出す第一次産業、そして農山漁村の価値を「体験」を通じて身をもって実感し、考え、他者に伝える力を身につけていることが必要である。

このような力量を備えた教師を育成することは食糧生産基地北海道、とりわけ我が国有数の農業地帯に囲まれた道東に位置する北海道教育大学釧路校の使命である。

※ 教育フィールド研究Ⅶ プロジェクトの概要より抜粋

北海道教育大学釧路校では、根室地区農協青年部連絡協議会及び株式会社ノースプロダクションの全面協力のもと、希望する学生に1泊2日の農村ホームステイを提供しています。

ホームステイは、根室地区農協青年部連絡協議会所属の酪農家宅で行っています。その後実体験を振り返るワークショップを行って「食」についての意識や考えを深め、将来、自身が教員になった時をイメージしながら子どもたちに「食の大切さ」等を伝えるための手段を検討し、議論・共有していきます。

酪農家民泊体験実習

いのち・食・生きるに触れる　２泊３日のプログラム

【酪農家民泊体験】

酪農家での農村ホームステイで
いのち・つながり・家族に触れ、
生きることを体感

【振り返り・講義】

ホームステイを振り返り、
また講義からそれぞれが感じたことを
ワークシートに記入

【議論・まとめ】

それぞれが感じたことをシェア。
いのち・食・生きるを軸に
みんなで議論

↓

子どもたちに何をどう伝えるのか？
体験をどう活かしていけるのか？

↓

将来教師になった時に必要な力を育む

平成 29 年度 酪農家民泊体験実習 実施報告

STEP 1

農村ホームステイ

**酪農家宅で１泊２日の
ありのままの生活体験**

１日目、大学を出発したバスは一路、根室管内へ。まず、牛の生態や酪農の仕事について酪農家さんから講義を受け、牛や酪農の基本を学びました。

その後 12 戸の受け入れ先の酪農家さんと対面。入村式を行った後、それぞれの家庭に散らばり、給餌・牛舎掃除や搾乳・哺乳といった１泊２日の農村ホームステイ、酪農生活体験がスタートしました。ふだん何気なく飲んでいる牛乳が、どんな場所でどんな人たちによって、そしてどんな想いの中で生み出されているのか？

酪農家さんのお宅での様々な作業体験のみならず、受入家庭での温かいふれあいなどからもたくさんの学びと気づきがありました。いのちの糧「食」が生み出される現場での実体験は、命と向き合い、「生きる」を考える大きなきっかけとなりました。

翌２日目のホームステイ終了後は、JA 根室地区女性協議会の協力で調理実習を行いました。

STEP 2

振り返り・発表準備

**生活体験を振り返り、
共有する**

２日目の午後は、根室管内標津町にある研修施設に移動。ワークシートに記入して、一人ひとりが自身の体験を振り返りました。その後グループワークを行って、ホームステイの感想や気づきを共有しました。

夕方には、「いのち」「食」「生きる」をテーマに、酪農家さんと本実習のコーディネーターである近江正隆氏に講話をいただきました。

３日目の午前中はグループワークの内容を参加学生全体で共有した上で、発表資料の作成等、受け入れ農家さんに向けた発表会の準備を行いました。

STEP 3

発表・講義

**いのち・食・生きるを
考える**

３ 日目には受け入れ酪農家さんをお招きし、農村ホームステイを通じた学びの成果を発表。お昼は受け入れ酪農家さんとバーベキューをしながら交流し、体験を通して感じたことを語り合いました。

１泊２日の短い時間でしたが、想いを共有した酪農家さんと学生が、思わず涙する場面もありました。学生たちは、「いのちの糧・食」とそれを生み出す第一次産業・農山漁村の価値を実感すると同時に、「つながり」や「つながりへの感謝」も感じているようでした。

STEP 4

コンセプトマップ

**体験前後の知識の変化を
可視化して実感**

事前研修会と実習 ２ 日目に、それぞれ「牛と自分の関係」を図式で表すコンセプトマップを作成しました。

自分の書いた事前・事後の２つのコンセプトマップを見比べ、農業に関わる「知識」の増加や「知識構造」の変化など、体験前後の自身の変化を実感しました。

平成 29 年度 酪農家民泊体験実習の概要

実施日：平成 29 年 5 月 26 日 ～ 5 月 28 日
実施地：根室管内
参加者：教育フィールド研究Ⅶ選択学生・院生 24 名

5/26

8：00　出発式・大学出発
10：00　酪農に関する勉強会
11：00　入村式・酪農家さんとの対面
11：30　農村ホームステイ開始（搾乳・牛舎掃除・給餌体験など）

5/27

11：45　農村ホームステイ終了
12：00　調理体験実習
15：00　講義①（グループワーク・講話）
19：00　夕食

5/28

7：00　起床・朝食
8：30　講義②（発表資料作成）
11：30　振り返り発表会
13：00　バーベキュー交流会
14：00　退村式

これまでに参加してきた学生の感想

伊藤 美実〈いとう みちか〉 2014 年受講

中標津町出身。現在、中標津町立中標津小学校 5 年生担任。

●教師になった今振り返る酪農家民泊体験の意味

「食」「いのち」「生産」「直接体験」など、多くのキーワードと学びがありました。私の場合だと、たまたま地元で体験することができ、現在地元で働けているので、今振り返ると地元の再発見の機会でもあったように感じています。「自分の地元ってすごいところだったんだな」って誇りを持って働けていますし、子どもたちにもそれが伝わっていると思います。

●今後活かしていきたいこと

今は教員 1 年目で日々いっぱいになりがちですが、現在栄養教諭の先生が行ってくれている、食育の授業も自分で担当してみたいと思います。そして、直接体験や生産者さんの声を直接聞けるような活動も設定していきたいと思っています。大学時代に体験したからこそ、私から伝えられることもあります。一方で、生の体験や生の声の偉大さも、酪農家民泊体験で学びました。

●後輩たちへメッセージ

この授業での経験と学びは、教師になった際に本当に多くの場面で活用できる感じています。例えば社会科では産業に関する授業で、生産者さんの顔や声、想いを知っていると、子どもたちに伝えられる幅が格段に広がると思いました。そして、本当に少しだけですが、自分も体験したことによって、その時感じたことや、「本当に大変なんだ」ということを心から伝えられていると感じています。

年代 恵香〈ねんだい あやか〉 2015 年受講

釧路町出身。現在、大樹町立大樹小学校 6 年生付（家庭科・音楽科専科）。

●教師になった今振り返る酪農家民泊体験の意味

本を読んで頭で理解するだけでなく、実感を伴う学びの重要さを感じました。例えば牛の体温は実際に触らなければわかりません。私自身、体験以降、食品は生産地を見て買い物をするようになりました。そして、家庭科の授業では、少しでも「生産地を意識して買い物をする」ことを学んでもらうため、教室でラベルの見方を教えるだけでなく、39 名の子どもたちを連れて、調理実習の買い出しに行きました。当時の体験がなければきっとそのような発想もできなかったと思います。

●今後活かしていきたいこと

酪農の現場でどれだけの人たちがどれだけ手をかけて、牛乳を生産しているのかを学ばせていただきました。子どもたちには、牛乳や食べ物はもちろん、全てのものに「生産している人」がいることを伝えていきたいです。また、新たに「流通」「加工」などについても直接学びにいき、全てのものが消費者の手に届くまでに多くの人が関わっているのだということを自ら感じ、子どもたちに伝えていければと考えています。

●後輩たちへメッセージ

将来、生産現場から離れてしまっている都市部で勤務する場合は、体験で得た学びを子どもたちに還元することが重要であると思います。また、逆に私が現在勤務している大樹町では酪農を営まれている方がとても多いです。子どもたちだけでなく、保護者の方や地域の方と、「酪農」という共通の話題でコミュニケーションできることが私にとって強い助けになっています。いずれにしても自分の強みを獲得できる授業だと思います。

酪農家民泊体験実習コーディネーターからのメッセージ

現在、この国の全労働者人口における一次産業従事者の割合は、わずか 4%。100 人中 4 名。つまり 25 人に 1 人が農林漁業に従事しているという計算だ。興味を持ちぼくが生まれた時代（48 年前）を調べてみた。その割合は 20%。つまり 5 人に 1 人。そしてぼくの親が生まれた時（80 年前）は、なんと 48%。つまり仕事に就いている人のほぼ 2 人に 1 人が農林漁業に従事していたことになる。

きっと昔は、多くの国民が家族や親戚の中に農林漁業者がいたんだと思う。つまり農林漁業・農山漁村が自分事として捉えることが可能な身近な存在だった。でも人口が首都圏・大阪や名古屋などの大都会に集中し、世代が次に変わるごとに自分事に考えられる立場の人たちは少なくなり、いまのような状態になってしまった。きっとこの割合はまだまだ減少しかねない…。

生きていくために欠かせないものがある。どんなに強くなっても、どんなに賢くなっても、どんなに偉くなっても、水や空気、そして食べ物がなければぼくらは生きていけない。そしてそれは、農山漁村で育まれている。農山漁村はそこに住む人たちだけに留まらない社会全体として大切な場所。でも残念ながら、大切な場所だと思うことをイメージできるような身近な存在でなくなってしまっていることが、様々な社会のねじれを生む要因をつくり、社会不安を作っている大きな原因ではないだろうか？　だから敢えてしなければならないこと。それは国民みんなが農山漁村を身近に感じ、自分たちの家族が住むようなイメージを持ち、愛着をもって自分事として感じてもらうようになるための仕組みづくりだと思う。そのための有効的な手段が「農村ホームステイ」であり、仕組みづくりに向けては、農と学びの更なる連携が不可欠だと感じている。

株式会社ノースプロダクション 代表取締役

近江 正隆〈おうみ まさたか〉

1970 年東京生まれ。19 歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・林業・漁業を経験。現在企画会社ノースプロダクション代表取締役、また十勝管内で農村ホームステイを推進する NPO 法人食の絆を育む会理事長、北海道地域づくりアドバイザーなどを務める。また、著書「だから僕は船をおりた」（講談社）がある。

参加学生の感想

高野 奏理〈たかの かなり〉

地域環境教育専攻・地域社会と環境研究室 3 年

お世話になった酪農家さんは、食の根底を支える酪農家としてプライドをもって働いていました。その姿を見て，自分も仕事に就いたときには同じようにプライドを持って働きたいと強く思いました。また、プライドをもって働いている酪農家さんを支える家族の温かさを感じることもできました。今回の酪農体験をして、私はもっともっと大学生活の中で色んなことを経験したいと思うようになりました。

安田 洋幸〈やすだ ひろゆき〉

地域学校教育専攻・臨床教育学研究室 3 年

私の実家は農業を営んでおり、農業の大変さは知っているつもりでした。しかし、今回の酪農体験で農業に取り組む方々の姿を見て、その大変さを改めて実感することができました。100 人いれば 100 通りの酪農業があるといわれていると聞きました。他の酪農家さんのやり方も見てみたいですし，他の第一次産業にもふれて、自分の引き出しを更に増やしていきたいとこの体験を通じて考えるようになりました。